

要旨

資料紹介 彦根藩井伊家当主の外出記録―「御出留」(文化九年・十年)―

あらた ゆういち わたなべこういち
荒田雄市・渡辺恒一

本稿は、彦根藩井伊家文書(重要文化財、彦根城博物館蔵)の内、文化9年(1812)から同10年にかけての井伊家12代当主直亮なおあきの外出記録である「御出留」を翻刻し紹介するものである。

直亮は、文化8年に19才で当主(藩主)となり、同9年6月に江戸から彦根に国入りし、翌10年4月まで彦根に滞在した。「御出留」は、この期間において、直亮が彦根城から外出した62日分を記録する(ただし、彦根城本丸や同第2郭限りでの移動、および井伊家菩提寺清凉寺などへの寺社参詣は記録されない)。記録作成者は、側役そばやくと御鷹頭取おたかとうとりを兼ねた側近家臣にしほりさいすけの西堀才介かわきたしろうべえと河北庄兵衛である。

外出の内容は、6月から9月までの期間では、朝妻川あさづまがわ(天野川あまのがわのこと。現米原市)での漁獵や、琵琶湖岸の磯浦(現米原市)・松原浦(現彦根市)での大網おおあみ(大型の網を使う漁)などの水辺での活動のほか、鉄砲稽古、藩の砲術師範による稽古を見分する「丁打御覧ちやううちごらん」が見られる。また、10月から翌年の4月までの期間では、鷹狩り(鷹を使い、鴨などの鳥を捕まえる狩猟)での外出が主となり、彦根城より北方面の松原内湖・入江内湖、南方面の荒神山近くの湖岸地域などで鷹狩りを行い、2月には、鹿狩りを多賀と鳥居本で2回実施している。そのほか、9月には愛知川までの馬の遠乗り、9月と11月、翌10年4月には、城下町郊外にある家老屋敷に訪れている。

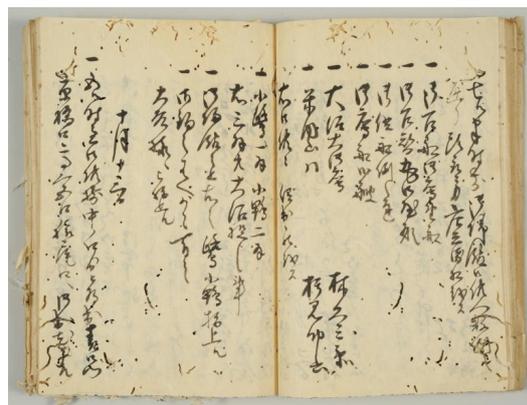
以上のように、彦根城外での直亮の行動が具体的な場所に即してわかることが「御出留」の特筆すべき点である。また、それぞれの外出について、直亮の居所である彦根城表おもてごてん御殿から出発してから帰館するまでの経路が記される。特に城下町内を通過する時の道順は細かく書き留められ、この点も得られる情報として貴重である。移動は、舟や駕籠かご、馬で行われるが、直亮自らが歩くことも意外に多く見られる。これらの移動手段が巧みに組み合わせられ、直亮とその御供おともの一行が移動していく様子は興味深い。本稿では、行き先と経路をまとめた外出記事の一覧表もあわせて掲載した。

「御出留」には、若き日の直亮の精力的な活動が記されている。今後、井伊家当主の日常の実像を明らかにするための基礎資料として活用していく。

要旨



「御出留」(表紙)



「御出留」(文化9年10月9日条・同13日条)

要旨

資料紹介 「添乳之枕」

北野 智也

本稿は、彦根藩領の近江国神崎郡普光寺村（現彦根市）で庄屋役を務めた茂竹庵笹雄（1810-1894 頃）が記した歌集「添乳之枕」（個人蔵）の全文を翻刻、紹介するものである。本資料には、天保11年（1840）頃から明治26年（1893）にかけて、花鳥風月や大事件などに取材した歌が挿絵とともに概ね毎年記され、その総数は205句を数える。

本資料の大きな注目点は、自筆の歌とあわせて略記される、それぞれの歌を詠んだ経緯である。そこからは、彼の家族構成や交友関係がうかがえるだけではなく、普光寺村を襲った日照りや洪水、地震などの自然災害による被災状況、また桜田門外の変後の政治変動に伴って行われた彦根藩領の上知（幕府が領知を召し上げること）の様子なども垣間見ることができる。桜田門外での報に加えて、彦根城下へ水戸の一門が押し寄せるという話を聞いた彦根藩領内の百姓が竹槍を取って城下へ押し寄せた、という記述や、上知の対象となる普光寺村などでそれに反対する騒ぎが起こっていた、という記述は、幕末期に揺れ動く彦根藩領の社会状況を色濃く示すものといえよう。

本資料は、彦根藩領で庄屋役を務めた茂竹庵笹雄という人物の目線から、彼の交流関係や領内の在地社会の様々な様子を現在に伝えている。今後さらなる分析を進めることで、彦根の地域史や文化史をより豊富なものにしていくことが期待される資料である。



「添乳之枕」（表紙）



「添乳之枕」（左頁は普光寺村を襲った洪水を伝える部分）